

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 1 日現在

機関番号：14403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381266

研究課題名(和文) 地域との協働による音楽科における「郷土の音楽」の学習プログラム開発

研究課題名(英文) School Music Program Development of Local Traditional Music in Cooperation with Community

研究代表者

小島 律子 (KOJIMA, Ritsuko)

大阪教育大学・教育学部・名誉教授

研究者番号：20116156

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本伝統文化の学校教育への導入のために、音楽科の地域教材である「郷土の音楽」の学習プログラム(デジタルコンテンツ付き)を、学校と地域が協働して開発することを目的とした。

「郷土の音楽」とは民謡やお囃子のような人々の生活に根ざした日本伝統音楽であり、音楽科における地域教材といえる。先行研究の考察より、生活経験の時空間、基層的リズム、即興性を枠組みとする指導内容モデルを作成した。そして地域文化の伝承者による教材開発のワークショップを経て、9例の学習プログラムを考案し、すべて授業実践を通して検証した。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this study was to develop school music programs with DVD video of local traditional music in cooperation with community. Based on the consideration of the preceding studies, a teaching content model for school music programs was developed, which consists of the space and time in daily experience, the substratum-bound rhythm of performance, and the extemporaneity. Then nine school music programs were designed with the help of comments by the community-dwelling memory keepers in workshops. And the evidence of programs was validated through practices in school music classes.

研究分野：教育学

キーワード：郷土の音楽 音楽科 地域との協働 地域教材 日本伝統音楽 学習プログラム 教材開発

1. 研究開始当初の背景

(1) 学校教育における日本伝統音楽の重視

近年、学校音楽教育において日本伝統音楽が重視されてきている。そこでは、文化遺産の相伝を主眼とする立場とは異なる、学校教育としての教科内容と方法が求められている。筆者は、文化は継承されつつ生成・創造されていくものという立場に立ち、子どもの生活にかかわりをもつ「郷土の音楽」の教材化に着目した。自分の生活する土地の自然、風土、社会、文化を土壌とする「郷土の音楽」を教材とすることで、社会的、歴史的、文化的文脈をふまえた日本伝統音楽の学習が可能になるのではないかと考えた。また、このことは、現在課題とされている学校での日本伝統音楽のカリキュラム構築に貢献するものではないかと考えた。

(2) 地域教材のもつ教育的意義

地域教材は、これまで音楽科のみならず他教科また学校教育全体において特別の意味づけをされてきた。郷土性に着目した教育としては、歴史的にみればドイツの郷土科、日本の明治以来の郷土研究、郷土教育、郷土科が挙げられる。そこでは郷土を学習の対象とすることで環境を通じた人間形成や主体的な探究学習が為されることへの期待があった。地域教材には、自分が生活している土地の学習をすることに特有の教育的意義が付与されてきたのである。「郷土の音楽」の教材化により、このような意義を21世紀の現代において音楽科の立場から捉え直そうと考えた。

(3) カリキュラム形成における学校と地域との協働システムの構築

「郷土の音楽」は音楽科における地域教材といえる。学校が孤立した閉ざされた組織機関ではなく、地域と協働して子どもたちを育てていくということが現代的な教育課題となっている中で、各教科において地域教材は地域と学校が連携する一つの方法とされてきている。「郷土の音楽」の教材化においては地域の伝承者の関与が必須とされる。それは単に伝承者に学校に来てもらって太鼓を教えてもらうというようなイベント的なものとは異なり、伝承者に教師と協働して、指導内容の抽出、授業構成、授業実践、授業評価という一連の授業デザインに参加してもらうということである。

「郷土の音楽」の学習プログラム開発には授業デザインの次元での学校と地域との協働が必然的に求められることから、結果的に学校と地域が協働する方法の一つの形を提案できると考えた。

2. 研究の目的

本研究は、日本伝統文化の学校教育への導入のために、音楽科の地域教材である「郷土の音楽」の学習プログラムを、学校と地域が協働して開発することを目的とした。

「郷土の音楽」とは民謡やお囃子のような

人々の生活に根ざした日本伝統音楽であり、音楽科における地域教材といえる。地域文化の伝承者と協働して、郷土の音楽の学習内容の系統化・具体化を図り、協働の成果をデジタルコンテンツ付きの学習プログラムの形で提案することにした。

3. 研究の方法

(1) 郷土の音楽の調査・発掘

大阪、奈良、兵庫を範囲とし、2013年7月に大阪教育大学附属の天王寺小・平野小・平野中学校の保護者にアンケート調査(回収約300名)を行った。知っている郷土の音楽について、市町村、曲名、場面、時期について項目を立てた。回収後、アンケートに挙げられた郷土の音楽をインターネットで調査した。また、産業の変化に伴い今は唄われていない作業唄(酒造り唄)についても発掘調査を行った。

(2) 授業デザインおよび伝承者によるワークショップ

アンケートで回答のあった郷土の音楽について、知名度、広域性、音楽的な明瞭性から教材候補を選択し、その音楽の特徴から指導内容を選び、授業展開を構想した。そして、地域の伝承者によるワークショップを企画し、教師を含む関係者が伝承者から実技指導を受けた。そこでは特に、指導内容および子どもの活動について意見を伺い、指導内容に関する音源教材を伝承者のパフォーマンスの録音・録画により制作した。

(3) 指導内容モデル作成

先行研究の検討によって郷土性について考察し、郷土の音楽の特性から3つの視点(生活経験の時空間)[基層的リズム][即興性]を導いた。そしてこれら3つの視点から指導内容モデルを作成し、このモデルにより研究授業を実践・検証した。

(4) 学校全体として郷土の音楽を重視している学校の視察

台湾の原住民族であるタイヤル族の文化をカリキュラムの核に置いているプーマ(P'uma)小学校、および、沖縄の伝統音楽を全校集会に取り入れている琉球大学附属小学校を視察し、学校教育全体における郷土の音楽の教育的意義について考察した。

4. 研究成果

(1) 指導内容モデルの提出

郷土の音楽に関する先行研究の検討により、郷土の音楽の特性を〔生活経験における時空間〕〔基層的リズム〕〔即興性〕の3点として導いた。そして「生成を原理とする21世紀音楽カリキュラム」(日本学校音楽教育実践学会、2006)の3つの柱(「人と地域と音楽」「音楽の仕組みと技能」「音楽と他媒体」)を参照し、そこに郷土の音楽の特性の3つの視点を組み込んだ指導内容モデルを作成した(小島・藤本、2015a)。指導内容モデルは三層から成る三角形になっており、下層

は〔生活経験における時空間〕、中層は〔基層的リズム〕、上層は〔即興性〕を視点とする。それらは以下のような関連となっている。

まず、地域特有の地形や気候、産業や歴史や文化等は〔生活経験の時空間〕を生み出し、そのうえに郷土の音楽は生成される。学習者はその土地に生活する存在として無意識のうちその時空間を感じ取っている。その時空間に脈拍のように通底している〔基層的リズム〕は、表現媒体としての言葉や動きや音楽に材料を求め、それらの材料は〔基層的リズム〕によってコラボレーションされ、全一一体としてのパフォーマンスに統合される。コラボレーションされたパフォーマンスは、〔基層的リズム〕に支えられて、その場その時の気分に応じて音楽や動きや言葉を少し変えていく。これが〔即興性〕である。

(2) 学習プログラム作成と実践

上記の郷土性の3つの視点から郷土の音楽の学習プログラムを考案し、実践検証した。今回、教材として取り上げた郷土の音楽は9例（大阪天満宮天神祭どんどこ船のお囃子、神戸市谷上の農村歌舞伎《車引き》、堺の布団太鼓、大阪平野郷夏祭りのだんじり囃子、大阪市平野区杭全神社の御田植え神事、大阪天満宮天神祭の天神囃子、大阪府池田市酒造り唄、大阪府阪南市秋祭りのやぐら太鼓、大阪の伝統芸能文楽《新版歌祭文》）である。そのうち、平野郷のだんじり囃子、および堺の布団太鼓は、発達の可能性を探るために異なる学年で実践した。研究授業は計13例である（13例の学習プログラムは大阪教育大学教科教育学会『教科教育学論集 13～16』2014, 2015, 2016, 2017に掲載）。

各学習プログラムには、だれもが実践できるようにデジタルコンテンツ（DVD ビデオ）を付けた。DVD ビデオには、催しの本番の様子、ワークショップでの伝承者のパフォーマンスとその指導過程、授業で使った教材音源、実際の授業過程を集録している。

学習プログラム作成の要点を以下に述べる。

ア、主たる指導内容を一つ設定する。それはその音楽の〔基層的リズム〕を体現しているものとする。そして、その〔基層的リズム〕に関係する風土・歴史・社会・文化的な背景、および多媒体の結びつきを特定し、授業構成に組み込む。

イ、〔基層的リズム〕に子どもが身体的同調し、身体や感覚器官の複数を協応させて働かせる場を設ける。

ウ、映像等を通して地域の中での催し全体のイメージがもてるようにし、自分たちの教室でのパフォーマンスを実際の催しに関連付けさせ〔生活経験による時空間〕を意識させる。

エ、〔基層的リズム〕という秩序ある律動を経験させ、パフォーマンスには、その中で子どもが今の自分の感性の表現である〔即興性〕が発揮できる余地を持たせる。

学習プログラムの実践分析の結果、3つの視点の相互関連を認めることができ、指導内容の学習状況も評価規準を満たしたことが検証できた。

(3) 学校と地域との協働の方法

学校と地域との協働においては、以下の方法を取り、指導内容を軸に進めること、対話のコミュニケーションが重要ということを確認した。

ア、教科の教育課程に基づき、教師がその教材の指導内容を設定する。そこから、設定した指導内容に関するワークショップの内容や制作すべき音源教材が導かれる。

イ、ワークショップでは、教師が伝承者と相談して、パフォーマンスにおける可変的要素と不変的要素を見出す。ここで子どもの発達段階と音楽の真正性との統合を図る。

ウ、ワークショップの形態では、伝承者が一方的に講義や実技指導をする形ではなく、教師や参加者と伝承者との対話を重視する。また、伝承者がゲストティチャーとして授業に参加する場合も子どもと伝承者との対話によって進め、教師は対話の媒介役となる。

(4) アイデンティティ形成

視察に訪れた台湾のタイヤル族のプーマ小学校は台湾の国策としての原住民教育の実験校である。カリキュラムの中核に「ガガ」と呼ばれるタイヤル族の精神を置き、その周囲に各教科が配置されていた。そこでは音楽は今も消滅しつつあるタイヤル族の話し言葉と生活と一体となった存在であり、うたや楽器を鳴らすというのは音楽を教えるためではなく、タイヤル族としてのアイデンティティ形成のためであった。沖縄の小学校においても同様の考え方がみられた。

郷土の音楽を学校で教材とすることには、自身の核となるアイデンティティ形成につながることを期待されていた。

(5) 考察と今後の課題

研究授業の検証では、指導内容モデルの郷土性の3つの視点をもつ学習プログラムは、子どもたちの能動的な学習を引き出したといえた。

そこでは、これまでの授業観を転換させる様相がみられた。いつもなら椅子に座って教師の話聞く場所であった教室を、子どもたちは自分が生活している時空間に変えていった。彼らは〔生活経験による時空間〕の意識をもち、自主的に半被やら団扇やら家から教室に材料をもってきて、祭りの映像とともに踊ったり口唱歌を唱えたりしていた。また、郷土の音楽の学習では、教師よりも子どもたちの方がより豊かな経験をもっていることから、楽器についての説明も子どもが自主的に前に出て行い、太鼓も経験している子どもが前に出て叩き、みんなに教えるといった姿が頻出した。さらにそこに〔即興性〕を発揮して、子どもたちが掛け声や前奏等を自発的につくり出した。教師が取り仕切る授業ではなく子どもと協働してつくっていく授業が

実現されたといえる。

さらに、クラスに共同体形成がみられたことが注目される。太鼓を叩く子どもに周りの子どもが出だしの掛け声をかけたり、口唱歌をうたって応援したり、また、うたに合いの手が自然と出て、うたが終わりそうになると「もう一丁」と声をかけて再度繰り返したり、パフォーマンスの中で音によるコミュニケーションを通して子ども同士の関係がつかわれていった。

今後の課題として2点挙げられる。まず、郷土の音楽の教材性として、設定する指導内容次第でどの学年どの校種でも扱えるという柔軟性が見出された。そこで指導内容を系統づけて伝統音楽のカリキュラムを開発するということが課題となる。と同時に、郷土の音楽の〔生活経験の時空間〕は音楽科の範囲に収まるものではなく、生活科や社会科、理科、総合的な学習等との関連づけを有効にする。このような地域性を生かした学校全体のカリキュラムは、その学校の特色を生み出すと考えられる。

次に、郷土の音楽がどの発達段階にも応じることの可能な教材であるということから、インクルーシブ教育に適切な教材という見方ができる。この面から学習プログラムを見直すことが今後の課題となる。

<参考文献>

日本学校音楽教育実践学会『生成を原理とする21世紀音楽カリキュラム』東京書籍200618-21.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

小島律子, 地域文化の素材が教材となっていく過程: 子どもの生活経験から捉えた教科内容, 日本教科内容学会誌 3-1, 査読有, 2017, 36-46.

廣津友香, 小島律子, 渡部尚子, 小学校低学年における歌舞伎(農村歌舞伎)を教材とした鑑賞授業, 学校音楽教育実践論集 1, 日本学校音楽教育実践学会機関誌, 査読無, 2017, 29-34.

小島律子, 田中龍三, 兼平佳枝, 藤本佳子, 岡寺瞳, 椿本恵子, 渡部尚子, 大和賛, 廣津友香, 小林佐知子, 郷土の音楽の教材化第 報, 教科教育学論集 16, 査読無, 大阪教育大学教科教育学研究会, 2017, 87-111.

小島律子, 学校での構成活動による地域伝統文化の継承と再構成, 大阪教育大学紀要第部門64-2, 査読無, 2016, 7-34.

小島律子, 椿本恵子, 藤本佳子, 大和賛, 楠井晴子, 岡寺瞳, 郷土の音楽の教材化第 報,

教科教育学論集 15, 査読無, 大阪教育大学教科教育学研究会, 2016, 49-71.

小島律子, 田中龍三, 椿本恵子, 藤本佳子, 楠井晴子, 郷土の音楽の教材化第 報, 教科教育学論集 14, 査読無, 大阪教育大学教科教育学研究会, 2015, 85-102.

小島律子, 藤本佳子, 音楽科教育における「郷土の音楽」の指導内容モデル: お囃子の教材化における郷土性に注目して, 教科教育学論集 14, 査読無, 大阪教育大学教科教育学研究会, 2015, 31-46.

〔雑誌論文〕(計1件)

小林佐知子, 台湾における原住民文化を核とした学校教育の試み, 学校音楽教育研究 21, 日本学校音楽教育実践学会機関誌, 2017, 87.

〔学会発表〕(計3件)

小島律子, 地域の素材が教材となっていく過程: 子どもの生活経験から捉えた教科内容, 日本教科内容学会第3回研究大会, 2016年7月3日, 上越教育大学.

廣津友香, 小島律子, 渡部尚子, だれもが主体的に取り組む日本伝統音楽の授業: 小学校における歌舞伎(農村歌舞伎)を教材とした鑑賞授業, 日本学校音楽教育実践学会第21回全国大会, 授業開発プロジェクト, 北海道教育大学岩見沢校, 2016年8月21日.

小島律子, 地域文化の経験からみる構成活動の再認識, 日本デュイ学会第58回研究大会, 2014年10月4日, 同志社大学.

6. 研究組織

(1)研究代表者

小島律子 (KOJIMA Ritsuko)
大阪教育大学・教育学部・名誉教授
研究者番号: 20116156

(2)研究分担者

無 ()

(3)連携研究者

田中龍三 (TANAKA Ryuzo)
大阪教育大学・教育学部・特任教授
研究者番号: 60397792

(4)研究協力者

岡寺瞳 (OKADERA Hitomi)
兼平佳枝 (KANEHIRA Yoshie)
楠井晴子 (KUSUI Seiko)
小林佐知子 (KOBAYASHI Sachiko)
椿本恵子 (TUBASKIMOTO Keiko)
廣津友香 (HIROTSU Yuka)
藤本佳子 (FUJIMOTO Keiko)

大和賛 (YAMATO Akira)
渡部尚子 (WATANABE Hisako)